研究論文

通訳翻訳学の諸問題と大学院通訳翻訳学プログラムが目指すこと[1)]

Aims and Challenges of an MA Program in Translation Studies

菊　地　敦　子
Atsuko Kikuchi

People tend to think that translation or interpreting can be done by anyone who speaks two languages. There is still a lack of understanding in terms of what a translator/interpreter does, the skills that are required and the issues that are discussed amongst scholars of translation studies. This situation is similar to how people in the past used to think that anyone who speaks English can teach English. Nowadays, people realize that it takes more than being able to use English to teach the language, and they enroll in MA programs in TESOL to learn the theories of teaching. The field of translation studies has not yet reached this stage. In order to educate students on what a translator or an interpreter's job entails, it is necessary to invite professional translators and interpreters currently working in the field to explain how to develop skills required in their respective fields. As a graduate school, however, we are also responsible for training scholars of translation studies, so we must also provide classes where students can familiarize themselves with the theories of translation and interpreting. The need to introduce the practical aspect of translation/interpreting as well as the theoretical aspect of translation creates a challenge to designing a good MA program in translation studies.

キーワード
translation studies, source language（SL）, target language（TL）,
European Master's in Translation（EMT）, translation theories

１．序論

あらゆる分野で自分の言語とは異なる言語を話す人、あるいは異なる文化の国となんらかの形で関わらざるを得ない現代社会において私たちは翻訳、あるいは通訳に大きく依存している。数多く存在する国際機関で日本の立場を発信していくにも翻訳・通訳が求められるし、各学術

分野においても私たちは翻訳された文献に頼ることが多い。トランプ大統領が他の国の首脳とコミュニケーションを取る時そこにはいつも通訳者がいるし、重要な協定を結ぶ際には、その翻訳内容に基づいて同意がなされる。多くの移民を受け入れてきた欧米諸国では以前から翻訳家、通訳者が移民を助けてきた。そして日本でも今後外国人労働者の受け入れを拡大するとなると翻訳しなければならない文書が増え、通訳の需要も増えてくるであろう。

そんな中で一般の人は通常、二つの言語を話すことさえできれば翻訳、通訳はできるはずだと思いがちである。国際化を進めるにはとにかく外国語を話す人材を増やそうとする。元の言語（以降 Source Language, SL）とそれを訳した言語（以降 Target Language, TL）の両言語を知っている人が翻訳、通訳したのであれば、その訳がどのようにして行われたのかにあまり注意を向けることなく、私たちは翻訳されたもの、あるいは通訳された内容が元の言語で表現されたことと同じであると信じて疑うことは少ない。逆にそれを疑いだしたら、今の世の中は成立しなくなってしまう。それほど私たちは翻訳・通訳に頼っているのである。

それにも関わらず、翻訳とは何か、通訳とは何かを問う学問分野である翻訳学、通訳学に対する理解は非常に低いと言わざるを得ない。この論文では、翻訳学、通訳学を総して英語で広い意味の translation studies が抱える様々な課題について考えてみたい。このテーマを考察するに当たって、今年の初めに関西大学の学術研究員として MA in Translation Studies を開設しているイギリス、アメリカ、ニュージーランドにある 9 校の大学で集めた情報を参考にする。情報を集めた大学は以下の通りである。

英国	Aston University
	University of London（SOAS）
	London Metropolitan University
	Cardiff University
米国	New York University
	American University[2)]
	University of California, Berkeley[3)]
	Middlebury Institute of International Studies
ニュージーランド	University of Auckland

日本語で「翻訳学」あるいは「翻訳研究」というと書かれた文章の訳しか含まれないので、本論文で翻訳学と通訳学を含めた両方の研究を行う学問分野を指す際には英語の translation studies という用語を用いる。

２．Translation Studies に対する理解が低い理由

上の序論で述べた通り、一般的に通訳・翻訳は外国語ができる人であれば誰でもできると思われがちである。Translation studies に対する理解の低さは翻訳家、通訳者に対する理解の低さと繋がっているような気がする。今回行ったアメリカの大学で translation studies の科目を担当している先生の話では、アメリカでは翻訳家、通訳者のステータスがヨーロッパと比べて低いということだった。特に通訳者のステータスは非常に低いそうである。その理由は、通訳を必要としている人は英語が話せない人、つまり、多くの場合は移民であり、通訳の仕事は福祉の領域に入ると考えられてしまうのだと言う。外国人でも教養がある人は、英語を読んだり書いたり話したりすることができるはずだという英語中心主義の考え方をする人も少なくないようである。このような考え方をする人が多い限り通訳者、翻訳家のステータスは上がらないし、translation studies という学問分野に対する理解も高まらないとアメリカ東部、西部両方の大学の先生が嘆いていた。これはニュージーランドでも同じ状況だと聞いている。

一方、イギリスでは、ヨーロッパの影響もあって通訳者、翻訳家のステータスがもう少し高いようである。日本はどちらかというとイギリスに近いかもしれない。

日本では翻訳家、通訳者の仕事が重要なものだと認められていることは良いことだが、では、どうしたら翻訳家、通訳者になれるかというと、その道筋ははっきりしていない。日本には通訳技能検定試験、日本翻訳連盟の JTF ほんやく検定、サンフレア・アカデミーの翻訳実務検定 TQE、日本翻訳協会の JTA 公認翻訳専門職資格試験などがあるが、翻訳家になるために取得しなければならない資格は公式にはない。通訳者、翻訳家として活躍している多くの人はしっかりとした外国語教育を受けてきた人が多いが、必ずしもこのような資格を持っているわけではない。また、近年、いくつかの大学院が translation studies のプログラムを提供するようになったが、このような大学院で得た学位が翻訳家、通訳者になるための資格として公に認められているわけではない。そのため、何のために大学院で translation studies を勉強するのかがはっきりしていない。

このような状況は日本だけでなく、イギリス、アメリカ、ニュージーランドでも似たところがある。ただ、イギリスの大学院の場合、ヨーロッパの MA in Translation Studies の質を管理する European Master’s in Translation（EMT）[4)]のガイドラインに沿ったプログラムを提供している大学院がいくつかあり、そのような大学院の MA を取得していればヨーロッパの翻訳市場で働くレベルに達していると認められる。今回訪問したカーディフ大学の MA in Translation プログラムは EMT のガイドラインに沿ったプログラムを提供している。EMT のガイドラインによると、MA in Translation Studies で取得しなければならない能力は５つある。それは以下の能力である。Language and Culture, Translation, Technology, Personal and Interpersonal, Service Provision ― つまり「言語と文化」、「翻訳」、「テクノロジー」、「自己管理」、「実務」に関する

能力を持っていなければならない。「言語と文化」に関する能力とは、翻訳する言語ペアのそれぞれの言語に関する言語学的、社会言語学的、文化的知識だけでなく、両言語を超えた文化に関する知識を指す。通常、ペアとする言語それぞれで言語能力を測る世界基準として用いられるCEFR（Common European Framework of Reference）のC1レベルに達していなければならないとされている。「翻訳」能力というのは、SLからTLへ意味を訳す能力だけでなく、方略的にコンテクストにあった訳ができる能力を指す。その中にはSLテクストを分析して適切な方略を選択する能力、SLテクストをまとめ、言い換える能力、SLテクストの重要箇所を識別する能力、関連分野の知識をアクセスする能力、文体、専門用語を使う能力なども含まれる。「テクノロジー」能力とは、機械翻訳を含む現在利用できる様々な翻訳テクノロジー・ツールに関する知識である。検索ツール、コーパス・ツール、テキスト分析ツール、CAT（Computer-Assisted Translation）ツールに関する知識を指す。「自己管理」能力とは、時間管理、ストレス管理、クライアントが定めた締め切り、指示、スペックなどを守る能力の他に自己評価をする能力、継続的にスキル・アップする能力も含まれる。「実務」能力とは、プロの翻訳家としてその職業に関して持っていなければならない知識を指す。例えば、クライエントとの交渉能力、翻訳プロジェクトの管理能力、予算を計上する能力、倫理規定に沿って実務を行う能力が含まれる。

このような枠組みに沿ったプログラムの学位を取ることは翻訳家を目指している学生にとっては魅力的である。MA in Interpretingには同様のガイドラインというものがないが、イギリスでもアメリカでも一定の基準を満たしたMA in Translationを取得していると、翻訳家、通訳者を目指す人にとって有利だと言われている。日本でもこのような考え方が浸透すれば大学院で通訳翻訳学を学ぶ学生が増えると考えられる。

3．Translation Studiesにおける諸理論

Translation studiesの分野を複雑にしているのは、その分野が通訳者、翻訳家を養成するためだけのものではないことにある。多くの大学院では翻訳あるいは通訳にまつわる様々な問題に関する理論を教えることに重点を置いている。アメリカの大学院のほとんどはそうである。翻訳家、通訳者養成に特化しているのはカルフォニアのモントレーにあるMiddlebury Institute of International Studies（MIIS）くらいである。

翻訳理論にはことばの意味と翻訳の不確定性に関する理論、等価とは何かに関する理論、翻訳が何のために使われるのかに焦点を当てたスコポス理論[5)]など様々な理論がある。このような理論は、翻訳や通訳という実践的な行為とは独立して教えることができるが、その内容をより深く理解するには翻訳や通訳を実際に行うことによりその意味を考えることが求められる。

Translation studiesのプログラムには、理論と実践がバランス良く含まれていなければいけな

いという点は外国語教育学のプログラムと共通していると言えるかもしれない。例えば英語の先生になるにはまず英語力が要る。しかし、英語が話せるから教壇に立ってすぐに英語が教えられるかというとそうとは限らない。試行錯誤しているうちにある程度やり方がわかってくることもあるかもしれない。しかし、より良い教員になるには学生がどのように知識を習得するのかという理論も勉強しなければならないし、英語がどのような言語体系をなしているのかも知らなければならない。そういう知識を身につけるために大学院で応用言語学、TESOL を学ぶのである。

Translation studies に話を戻すと、翻訳家、通訳者になるにはまず SL と TL の 2 言語をマスターしていなければならない。言語ペアが英語と日本語であれば、この二つの言語をマスターしていることは必須である。上に述べた通り、EMT によると二つの言語で CEFR C1 レベルに達していることが望ましい。翻訳家、通訳者は 2 言語を完全にマスターしているだけでなく、SL 文化、TL 文化に関する豊富な知識が必要であるし、EMT ガイドラインが示している様々な能力を持っていなければプロの翻訳家、通訳者になれない。さらに腕を磨くとなると、上に述べたような理論も知らなければならない。もし翻訳家、通訳者を指導する教育者になることを目指すとしたら、理論に関する知識は必須となる。

英語の教員、翻訳家、通訳者という職業に就くのに、理論の習得は求められないかもしれない。実際、翻訳家養成、通訳者養成という職業訓練に力を入れている海外の大学院では理論は教えていても、学生が理論に関する知識を習得したかということよりも、それを実践に応用できるかを重要視している。しかし、翻訳家、通訳者を教育する側の先生は翻訳、通訳に関する理論をしっかり勉強していないといけない。外国語教員養成でも同じことが言えるのではないかと思う。

４．外国語教育学と Translation Studies の違い

では、外国語教育学の分野と translation studies の分野はどこが違うのだろう。まず、プロの翻訳家、通訳者になるための条件は EMT ガイドラインが示しているように英語の教員になるよりかなりハードルが高い。そのせいもあってプロの翻訳家、通訳者を目指す人は外国語の教員を目指す人の数より圧倒的に少ない。英語の先生という職業は比較的ポピュラーで、教員になる道筋もほとんどの学生が把握している。それに対して翻訳家、通訳者という職業の実状については、あまり知られていない。どのようにして翻訳家、通訳者になれるのかという方途については情報が限られている。また翻訳、通訳という職業で生計を立てていくことができるのかについても学生にとって未知の要素が多い。

本学の外国語教育学研究科では現役の英語の先生に来てもらって教育現場で実際にどのように授業をしているのかという講演をしてもらうことはあっても、外国語学教育方法論、外国語

授業実践論、外国語教育教材論、外国語教育論などの授業を担当してもらうということはあまりない。このような授業を担当するのはたいがいの場合応用言語学の理論をしっかり勉強し、その分野で博士号を持っている先生である。同様に翻訳通訳領域の翻訳教育概論、通訳教育概論を担当している先生もtranslation studiesの理論をしっかり勉強し、その分野で博士号を持っている先生である。しかし、通訳翻訳領域では多くの現役の翻訳家、通訳者または、翻訳、通訳の実務経験を豊富に持っている先生に実践研究の科目を担当してもらっている。なぜそのような実態になっているかというと、翻訳家、通訳者の仕事というのはどういうものなのか学生に知ってもらわなければならないからである。つまり、外国語教育学とtranslation studiesでは、スタート地点から、その分野に関する学生の知識が異なるのである。

Translation studiesの理論について学ぶ以前に、あるいは同時に翻訳の実践、通訳の実践とはどういうものかを学ばなければならないのである。

５．英語圏のMA in Translation Studies

Translation studiesが抱えている複雑な問題を英語圏の大学院ではどのように解決しているのか紹介したい。今回周ったイギリス、アメリカ、ニュージーランドの大学院でもTranslation studiesの理論と実践をどのようにしてうまく組み合わせていくかという課題を抱えていた。下に紹介するMA in Translation Studiesのプログラム内容を見ると、全ての大学院で理論も実践科目も置いているのがわかる。しかし大学院によってはどちらか一方に重点を置いているところもあれば、一つ以上の分野に重点を置いているところもある。また、いくつかの大学では英語とペアにしている言語をより多く提供しようとしている。

５.１　英国の大学の大学院

最初に紹介するのはイギリスのアストン大学、ロンドン・メトロポリタン大学、ロンドン大学（SOAS）、そしてウエールズにあるカーディフ大学のプログラムである。

バーミンガムにあるアストン大学のMasters in Translation Studiesは翻訳学に特化したプログラムである。異文化間コミュニケーションにおける翻訳の社会的役割、翻訳のプロセスの根底にある理論の枠組みを学ぶためのプログラムである。アストン大学の翻訳学プログラムが理論中心であることは、次の科目名を見れば一目瞭然である。Theoretical Concepts of Translation Studies, Text Analysis for Translation, Research Methods, Translation and the Representation of Culturesなどの科目を置いている。しかし、2019年からプログラムが変わり、これまで理論中心だったプログラムに実践の要素を取り込んでいる。現在コア科目に置かれているのはThe Translation Industry: Theoretical and Practical Perspectives I, Translation Technology I: CAT Tools and Localisation[6], Multilingual Specialised Translationで、選択科目にはフランス語、ド

イツ語、スペイン語、アラビア語、中国語、ポルトガル語と英語をペアにした実践科目が配置されている。

ロンドン大学の東洋アフリカ研究学院、通称SOASは他ではなかなか学べない言語の専門家がいることを活かして、MA in Translationでは日本語、中国語、朝鮮語の他にアラビア語、ペルシャ語、スワヒリ語、トルコ語を英語とペアにして翻訳の実践訓練を行なっている。しかし、これらの実践科目は選択科目で、異文化間の橋渡し的役割としての翻訳に関する研究、または翻訳理論のみに専念することもできる。コア科目は研究法を含めた翻訳学概論 Translation Studies and Methodologyと翻訳理論Translation Theoryの授業で、その他に自分の言語ペアに関する実践科目、文化の翻訳、翻訳テクノロジーに関する科目群から4科目選択する。さらに比較文学、文化や社会など翻訳に関連した科目群から2科目選択する。翻訳理論、翻訳方略、翻訳テクノロジーを身につけさせ、修了生が翻訳家として、あるいは二つの言語、文化の知識が必要な職につけることを目指している。

ロンドン・メトロポリタン大学（LondonMet）にはMA in Translationだけでなく、MA in Interpreting、MA in Conference Interpretingがあり、イギリスの中で特に実践に力を入れている大学院である。ホームページでもこの３つのプログラムは職業訓練プログラムであることを前面に出している。修了生のほとんどはコース修了後すぐに翻訳家、通訳者の職につく。言語ペアも豊富で、MA in Translationではアラビア語、ギリシャ語、イタリア語、日本語、ポーランド語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語、オランダ語を英語とペアにして勉強できる。LondonMetのMA in Translationは大学、大学院の翻訳と通訳教育の品質維持と向上を目指す国際機関Conférence Internationale Permanente d'Instituts Universitaires de Traducteurs et Interprètes（CIUTI）の教育品質認定基準を満たしており、資格を得たい現役の翻訳家にとっても魅力的なプログラムである。翻訳分野としては、法律文書、政治文書、医学文書、ビジネス文書、IT分野の文書、メディア関連の文書、公式文書などの文書の翻訳、ウエブサイトの翻訳、字幕翻訳、ソフトウエアのローカリゼーション[7)]にフォーカスを置いている。MA in Interpretingで英語とペアにできる言語は中国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、ポーランド語、ルーマニア語、ロシア語、スペイン語である。こちらも実践をメインとしている。MA in TranslationでもMA in Interpretingでもwork placementといって翻訳、通訳の仕事を体験する科目があるのもLondonMetの特徴である。そのために入学時点で言語能力はペアにする言語の片方はネイティヴ、もう一方はニア・ネイティブ・レベルであることが要求される。LondonMetではほとんどの科目がコア科目で、どれも実践的なものである。MA in TranslationではCharacteristics of Specialised Texts, The Translator and the Specialised Text, The Translator and the Translation Process, Translation Tools and the Translatorがコア科目である。LondonMetではMAを取得するのに翻訳理論に関する修士論文を書く他にIndependent Translation Projectといって、アノテーションがついた翻訳を提出しなければならない。修士論文では理論を理解した

ことをチェックし、翻訳プロジェクトではその理論を実践と結び付けることができているかをチェックするという。どちらか一方だけでは修了できないのが特徴である。MA in Interpreting のコア科目は Conference Interpreting 1, 2, Interpreting Theory and Research for Interpreters, Public Service Interpreting, The Interpreter's Professional Environment, The Interpreter's Skills and Tools である。MA in Interpreting のプログラムを修了するには通訳のパフォーマンスを評価される他に実践と理論を関連付けた論文を書かなければならない。

ウエールズにあるカーディフ大学の MA in Translation Studies は EU, 国連などでプロの翻訳家になることを志望している学生、あるいはジャーナリズム、広報など、言語関係の職に就きたい学生のために翻訳業界に関する情報、翻訳理論などの科目を提供している。上で述べたようにカーディフ大学の MA in Translation プログラムは EMT のガイドラインに沿ったプログラムを提供している。英語とペアにするあらゆる言語に対応するという点と work placement がカリキュラムに組み込まれていることがプログラムの特徴である。コア科目は Translation Methods and Skills と Theory of Translation だけで、選択科目は Introduction to Interpreting, Specialised Translation: Medical and Pharmaceutical, Specialised Translation: Subtitling, Translation of Minority Languages, Translation and Cultures, Translation as Creative Practice などあらゆる言語ペアに応用できるような内容の科目を配置している。修了するには研究論文を書くオプションとアノテーション付きの翻訳プロジェクトのオプションがある。

5.2　アメリカの大学院

アメリカ、ニューヨークにあるニューヨーク大学（NYU）の翻訳プログラムは MA ではなく、MS in Translation である。MS（Master of Science）が意味するのは、このコースがプロフェショナル・コースだということである。法律、金融分野の翻訳家養成に特化している。英語とペアにできる言語はスペイン語、フランス語、そして中国語である。履修する科目は翻訳理論、言語理論に関する科目、法律、金融に関する科目、翻訳の実践科目の三つのグループに分けられる。修了するのに研究論文を書くオプションと翻訳のオプションがある。翻訳はかなり長く、手が掛かるものでなければならないということである。

ワシントン D.C. にある American University のプログラムは MA プログラムではなく、Graduate Certificate Program で、Translation Certificate Program としては高い評価を得ている。英語と言語ペアにできる言語はフランス語、ロシア語、スペイン語である。言語教育の中のプログラムで、翻訳の実践科目と言語学関連の科目がコア科目として置かれている。American University ではアメリカへ移民した家族の子、孫が親や祖父母から受け継いだ言語、heritage language「継承語」を維持することを奨励しており、この Graduate Certificate in Translation を受講する学生の多くはこういった継承語を話す人たちだという。こういった学生は家庭内でフランス語、ロシア語、スペイン語を話しているわけだが、その言語レベルを翻訳のレベルまで上げるのが

難しいと先生が話していた。

カルフォニア大学バークレー校にはtranslation studiesの研究グループはあってもtranslation studiesというプログラムはなく、外国語の授業の一環として日本語とフランス語で翻訳の授業を提供している。しかし、2019年開始を目指して夏季集中講座としてtranslation studiesを提供する計画がある。この講座では、翻訳理論に関する科目、翻訳テクノロジーに関する科目、そして選択した言語と英語のペアの翻訳実践科目を中心に置き、選択科目として文学翻訳、機械翻訳、コミュニティ翻訳などを提供する予定である。Translation studiesの集中講座設立の動機を聞いたところ、外国語を専攻する学生が減少しており、学んだ外国語を使ってどのようなことができるかということの提案の一つとして各外国語の先生が集まってtranslation studiesを提供することになったということだった。

カルフォニアのモントレーにあるMiddlebury Institute of International Studies（MIIS）は通訳、翻訳の徹底的なトレーニングを提供して国際舞台で活躍する通訳者、翻訳家を輩出している大学として世界的に有名なところである。通訳翻訳分野で3つのMAプログラムを提供している：MA in TranslationとMA in Translation and Interpretation, そしてMA in Conference Interpretationである。コア科目としてIntroduction to Translation, Introduction to Interpretation, Translation Practicum, Introduction to Computer-Assisted Translation, Translation and Interpretation as a Professionが提供されている。これらの科目は特定の言語に特化せず、翻訳をする際にどのようなプロセスを経て作業をしているかを学生に自覚させること、そして翻訳に役立つ最新のテクノロジーを紹介すること、通訳の様々な形態を紹介し、MIIS内の講演会やイベントで実際に通訳を体験し、その体験を振り返って自己評価することを目標としている。言語ペアに特化して実践訓練を行う科目は日本語と英語のペアでは次のような科目である。Introduction to Interpreting into English, Introduction to Interpreting into Japanese, Introduction to Written Translation to English, Introduction to Written Translation to Japanese, Introduction to Sight Translation to English, Introduction to Sight Translation to Japaneseである。そして上級クラスも設けられている。英語とペアにできる言語は中国語、韓国語、日本語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語である。また、Localization Managementを専攻することもできる。Localization Managementというのは、ある商品、サービス、または概念を特定の地域の市場に適合させるプロジェクトの管理法を勉強する分野である。ローカリゼーションの分野はグローバル化に伴って急激に発展している分野である。

5.3　ニュージーランドの大学院

ニュージーランドのオークランド大学のMA in Translation Studiesはプロの翻訳家、翻訳の研究家を養成するためのコースである。オークランド大学ではPostgraduate Diploma in Translation Studiesも提供しており、このディプロマ・コースはニュージーランドの大学の中

で National Accreditation Authority for Translators and Interpreters（NAATI）の認定を受けている唯一のプログラムである。NAATI とは翻訳家と通訳者の資格を標準化し認定するオーストラリアの国家機関である。ニュージーランドには同様の機関がないため、NAATI の認定資格はニュージーランドでも利用されている。ディプロマ・コースには Community Translation と Multimedia Translation の専攻がある。MA in Translation はコア科目として Translation Theories and Paradigms を置いており、選択科目として Community Interpreting and Contextual Studies, Digital Translation, Computer-aided Translation（CAT）Tools、Audiovisual Translation、Digital Translation などの科目がある。実践科目としてフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、中国語そして日本語を英語とペアにした翻訳授業がある。

5.4　イギリス、アメリカ、ニュージーランドの大学院で得た印象

以上、9校の大学院で展開されている translation あるいは translation studies のプログラムを見てきたが、どこの大学院でも理論と実践の科目を置いていることがわかる。翻訳家、通訳者を養成するにも、翻訳、通訳の研究者、翻訳家、通訳者の教育を担う指導者を養成するにも理論と実践の両方の知識がなければならない。大学院によっては理論にウエイトを置いているところもあれば、実践にウエイトを置いているところもある。それはプログラムの目的によることもあれば、人材によることもある。どこの大学院でも言われていたことは、大半の学生が実践を希望することであった。しかし、学生の言語能力が必ずしも翻訳をするレベルに達していない現状もあるようだ。Translation studies は絶えず外国語教育と並行して行われるべきだという声も多く聞かれた。

Translation studies を教えている教員の資格について聞くと、イギリスの大学院ではほぼ全員が translation studies の分野で最低 MA は持っており、通訳あるいは翻訳の実務経験者だということだった。アメリカの Middlebury Institute of International Studies では教員のほぼ全員が translation studies の分野で学位を取っており、全員が通訳あるいは翻訳の実務経験者である。教員の研究論文と同様に継続的な翻訳あるいは通訳の実績が評価される。この大学院が通訳、翻訳の実務経験を重視していることが伺える。MIIS 以外のアメリカの大学院、そしてニュージーランドのオークランド大学で translation studies を教えている教員は必ずしも translation studies の分野で MA または Ph.D. を持っていない。コア科目は translation studies の分野で学位を取った教員が担当していても、その他の科目は外国語教育、言語学などの分野で Ph.D. を取得していて研究分野が translation studies という教員に頼っている。Translation studies という学問分野がアメリカ、ニュージーランドよりもヨーロッパ、イギリスで先に確立され、それだけ多くの専門家を輩出していることを物語っているのかもしれない。

6．関西大学の外国語教育学研究科における通訳翻訳学領域

最後に関西大学の外国語教育学研究科における通訳翻訳学領域について述べたい。関西大学大学院外国語教育学研究科の通訳翻訳学領域は2010年に開設され、染谷先生を中心に主にCook（2010）が提唱したTranslation in Language Teaching（TILT）を組み込んだ翻訳教育方法論、そして染谷先生が作成された『英語通訳訓練法入門』（2018）、「英日・日英通訳訓練教材データベース」（ver. 2010, 2018）のオンライン版テキストを使った通訳教育方法論を展開してきた。その趣旨は、通訳者、翻訳家の教育を担当する指導者養成にあった。しかし、染谷先生が2018年の初めにご退職されたためプログラムの内容をもう一度最初から考え直さなければいけなくなった。そこで、これまで上に書いたtranslation studiesが抱えている問題点なども踏まえて今後どのようなプログラムを展開して行ったら良いのか考えてみたい。

本稿の序論で書いたように、翻訳家、通訳者は現代社会では欠かせない存在なので、翻訳家、通訳者を目指す人はいなくなることはないであろう。しかし、ある意味で、まだ日本ではtranslation studiesという分野が確立されていない。Translation studiesを専門的に勉強しなくても、外国語ができる人は翻訳、通訳もできるだろうという社会的風潮がまだ残っている。確かに翻訳家、通訳者になるための多くのスキルは個人の経験に依存している部分が大きい。そのスキルをどのように構築してきたのか、現役の翻訳家、通訳者に語ってもらわないといけないとも言える。今、関西大学大学院の通訳翻訳領域では何人かの現役翻訳家、通訳者に「通訳演習」、「通訳実践研究」、「翻訳演習」、「翻訳実践研究」などの科目を担当してもらっている。このような授業から実際の通訳の仕事、翻訳の仕事とはどのようなものなのかを学生に理解してもらっている。その中で学生はEMTガイドラインが示す「翻訳スキル」、「自己管理スキル」、「実務スキル」を得ることが期待されている。

EMTガイドラインの他のスキルに関して言えば、「言語と文化スキル」は、「通訳翻訳研究（通訳翻訳と言語学）」、「通訳翻訳研究（通訳翻訳と語用論）」、「通訳翻訳研究（通訳翻訳と異文化コミュニケーション）」で英語と日本語の言語ペアを中心にそれぞれの言語に関する言語学的、社会言語学的、文化的知識を教授しており、「テクノロジー・スキル」は「通訳翻訳特殊研究（翻訳テクノロジー）」の授業で翻訳テクノロジー・ツールに関する知識を学生に身につけてもらっている。

スキルにおいては、EMTガイドラインで定めている領域をカバーしていると言えるのではないかと思う。しかし、関西大学大学院の通訳翻訳領域では通訳者、翻訳家を養成することだけを目的としていない。上に述べた科目を通して通訳・翻訳スキルを身につけてもらい、今後のスキル・アップに役立てて欲しいと考えているが、大学院である以上、染谷先生が指摘されているように通訳・翻訳に関する学問的知識を教授しなければならないと考えている。そしてそれは、「何らかの理論的または実証的根拠に基づいた体系的指導」（染谷2016）でなければなら

ない。現在、通訳理論に関しては「通訳教育方法論」、翻訳理論に関しては「翻訳教育方法論」という授業で通訳・翻訳を巡る諸問題を体系的に取り上げて講義している。これまではどのようにして通訳の訓練を行うか、語学教育の中で翻訳をどのように取り入れるかということが中心になっていたが、少しずつ今回視察したアメリカ、イギリス、ニュージーランドの大学院で行っているような通訳理論、翻訳理論を中心とする授業に移行していく必要があるのではないかと思われる。そうすることによって、これまで関西大学外国語教育学研究科の通訳翻訳領域の特徴であった「通訳者、翻訳家の教育を担当する指導者を養成する機関」から少し離れてしまうように思われるかもしれないが、EMTガイドラインが示すようなしっかりとした翻訳・通訳スキルを提供し、最新の翻訳・通訳理論を提供するスタンダードなプログラムを提供することによって、日本でtranslation studiesがしっかりと根ざすことに貢献し、translation studiesの専門家を輩出することができ、translation studies の分野の今後の発展に期待できるのではないかと思う。

現在、最終プロダクトとして翻訳理論、通訳理論を扱う修士論文のオプションと、翻訳とアノテーションのオプションがある。翻訳業界または通訳業界に関する調査を扱う課題研究のオプションもある。このようにいくつかのオプションを提供することによって、翻訳・通訳理論を扱う研究者を目指す学生、プロの翻訳家、通訳者を目指す学生、翻訳・通訳業界で仕事をしたい学生のニーズに答えられているのではないかと思う。

言語ペアは日本語と英語を中心としている。しかし、留学生、特にアジアからの留学生が増えるに従って英語以外の言語を日本語とペアにしたい学生が増えている。「通訳教育方法論」、「翻訳教育方法論」の授業で教えている通訳理論、翻訳理論はあらゆる言語ペアに当てはめて研究できるので、日英・英日以外の言語ペアを研究したい学生は学習した理論を自分の言語と英語または日本語のペアに当てはめて研究することができる。実践科目は日英・英日の通訳実践科目、翻訳実践科目以外に日中・中日の翻訳実践科目も開講している。日本語と英語以外の言語ペアを増やしていくための教員を確保するのはなかなか難しいが、今後日本語と中国語の言語ペアの分野を発展させたいと考えている。

また、まだ実現には至っていないが、ロンドン・メトロポリタン大学、カーディフ大学、MIISが行なっている work placement を関西大学学内で行うという案も出ている。学内文書の翻訳、講演会の通訳を大学院の通訳翻訳領域の学生にさせることにより学生は経験を積むことができ、通訳、翻訳の問題点を認識することができるのではないかと思料する。

７．最後に

グローバル化が進んだ現代社会で各分野における通訳者、翻訳家のニーズはますます高まっている。しかし、通訳者、翻訳家の仕事とはどんなものなのか、通訳者、翻訳家になるにはど

のようなスキルが必要なのか、そして通訳、翻訳に関してどのようなことが論じられてきたのか知る人はまだまだ少ない。ヨーロッパでは古代ローマ時代から翻訳について論じられてきたが、大学で学ぶ学問として translation studies が成立したのはつい 50 年ほど前のことである。日本で translation studies という分野を最初に提唱したのは成瀬（1978）であると Takeda（2012）は書いている。それはほんの 40 年前のことである。日本ではまだまだ translation studies の分野が確立されていない。このような状況であるため、大学院では、まず通訳者、翻訳家の仕事とはどういうものなのか、どんなスキルを必要とするのかを教授し、そのスキル・アップを目指さなければならない。翻訳の分野では、ヨーロッパで確立されている EMT のガイドラインを参考にその指導をすることが望ましい。このガイドラインはある程度通訳のスキル・アップにも応用できると思われる。さらに、大学院では通訳・翻訳の理論を教え、理論的または実証的根拠に基づいた通訳・翻訳研究ができる人材を養成していく必要があると考える。翻訳、通訳のスキルを養成すると同時に翻訳理論、通訳理論の講義を提供することによって、通訳者、翻訳家を目指す人、通訳、翻訳業界で仕事をしようとしている人、通訳、翻訳の研究者を目指す人を養成していけることを目指したいと思う。そして translation studies の専門家を日本で増やしていくことにより、translation studies が日本に根付き、更なる発展が期待できるのではないかと考える。

注

1）本研究は 2018 年度関西大学学術研究員研究費によって行われた。

2）アメリカン大学のプログラムは MA プログラムではなく、Graduate Certificate Program である。

3）カルフォニア大学バークレー校では現在 MA in Translation Studies のプログラムを開設していないが、2020 年度からサマースクールのプログラムとして translation studies の科目を提供することになっている。

4）https://ec.europa.eu/info/sites/info/files/emt_competence_fwk_2017_en_web.pdf 参照

5）スコポスというのはギリシャ語で「目標」という意味。スコポス理論はフェルメール（1989）によって提唱された。

6）Localisation（ローカリゼーション）とは主に商業活動として行われる作業で、SL 話者を対象に提供された商品あるいはサービスの内容を TL が使われている地域に合わせて TL 話者が理解しやすい内容、または TL 話者が好むような内容にすることを指す。

7）ソフトウエアのローカリゼーションとは SL で作成されたコンピューター・ソフトウエアを TL 話者が使えるように TL、TL の文化、TL の規定に合わせて変更することを指す。

参考文献

Cook, Guy（2010）. *Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment*. Oxford: Oxford University Press.

Takeda, Kayoko（2012）. 'The emergence of translation studies as a discipline in Japan'. In N. Sato-Rossberg & J. Wakabayashi（eds.）*Translation and Translation Studies in the Japanese Context*. London: Bloomsbury.

Vermeer, H. J.（1989）. 'Skopos and commission in translational action'. In L. Venuti（ed.）*The Translation Studies Reader*, 2nd edition, London: Routledge.

成瀬武史（1978）『翻訳の諸相』東京：開文社

染谷泰正（1994-2018）「英語通訳訓練法入門」授業用オンライン教材
［online］ http://someya- net.com/01-Tsuyaku/（2019 年 1 月 25 日現在）

染谷泰正（2002-2018）「通訳訓練教材データベース」授業用オンライン教材
［online］ http://someya-net.com/02-DataBase/（2019 年 1 月 25 日現在）

染谷泰正（2016）「関西大学外国語教育学研究科における通訳翻訳領域について」新入生用オリエンテーション資料（2016 年度版）
［online］ http://someya-net.com/00-class17/kandai/10_MasterSeminar/Grad_Orientation.ver2016.pdf（2019 年 1 月 25 日現在）